

木曾三川 歴史・文化の調査研究資料

# MSO

2015

春

Vol.94

平成27年

## 地域の歴史

長島一向一揆の興亡、桑名市長島町

---

## 地域の治水・利水施設

長島輪中の成り立ち

---

## 歴史記録

過去の災害を学ぶ 第四編

越美三大崩れと金原明善

---

## 研究資料

金城学院大学名誉教授  
宝暦治水史蹟保存会会長 中西 達治

宝暦治水と平田鞞負

---





# 長島一向一揆の興亡

## 寺内町長島の形成

天正二年一向宗一揆  
織田信長公長島攻図  
(「長島町史 上巻」より作図)



でも、本願寺は親鸞の法脈と血脈を伝える者が宗主を代々継承してきました。八代宗主・蓮如は、応仁の乱など戦乱が続く中、積極的な布教によって各地に門徒を増やしました。大坂の石山に拠った本願寺は、武力を持つ領主の介入を排除する「守護不入の権」、「徳政令を免除できる特権」、「諸役免除

の特権」などを獲得して寺内町を形成し、自治都市として繁栄をきわめました。

本願寺が得た寺内町の特権は、各地の末寺にも適用され、寺を中心とした経済特区が形成されました。その範囲は畿内から尾張・美濃・近江・伊勢などに及び、舟運を中心とした物流の要地が多く、運送や商工業が発達し貨幣経済が浸透する先進地域でした。門徒には、馬借・船乗りなど運送に携わる者や、漁師・商工業者などが多く帰依していました。

長島はその代表的な地域で、願証寺を中心に数十の寺院・道場が存在し、門徒に在地領主を取り込み、地域を完全に支配し、周囲に砦を築いて武装化していきました。当時の長島は、後の長島輪船上郷辺りの木曾三川河口部で、乱流する河川の間には砂州を開発した大小の島々が散在していたと思われまます。しかし、木曾三川流域の産物が舟運によって集積するとともに、桑名湊と津島湊の間にあつて海運の接続地でもあり、経済的に重要な拠点となっていました。

## 織田信長との対立

た。この経済力が寺のもつ特権と結びつくことで、大名に匹敵する強大な組織が形成されました。

永禄九（一五六七）年、美濃の稲葉山城（後の岐阜城）を攻略した織田信長は、上洛のために伊勢の平定を目指しました。当時の伊勢は南五郡を北畠氏が領し、北伊勢八郡は多くの領主が割拠していました。信長は、永禄一〇（一五六八）年から一二年にかけて三回の伊勢侵攻を行い、支配下に治めました。伊勢侵攻にあたって、信

天下統一を目論む織田信長にとって、石山本願寺とその末寺の勢力は大きな障害となりました。中でも長島町は、木曾三川河口部の願証寺（長島町杉江）を中心に寺内町として発展し、美濃・尾張を脅かす存在として、激しい戦争を繰り返しました。

長は長島には兵を入れず、衝突を避けています。

信長が長島を攻めなかったのは、背後にある本願寺と全面対決するには時期尚早であること、長島が河口に浮かぶ大小の島であることから攻略には多くの舟と操船技術に長けた兵員が必要となりますが、当時の信長にその用意がなかったことなどが考えられます。

永禄一一（一五六八）年、上洛した信長は、本願寺に「矢銭」と云われる軍用金五千貫（米一万石相当）を要求し、本願寺はこれを支払って信長との関係を穏便にすまそうとしました。しかし、その後も信長が本願寺に圧力をかけ続けたので、本願寺側も、三好三人衆や浅井・朝倉氏などと連携を図り、反信長勢力の一翼を担うようになりました。

元亀元（一五七〇）年、三好三人衆と交戦中の信長軍を本願寺門徒勢が攻撃しました。一〇年にわたる石山合戦の始まりでした。

## 信長の長島侵攻

信長との戦端を開いた本願寺



石山本願寺の推定地



蓮生寺（長島町又木）に残る長島城大手門



長島城跡（長島中部小学校内）



現在の願証寺

は、全国各地の門徒衆に檄文を送り、大坂への参集や各地での蜂起を促します。これに呼応して願証寺に続々と門徒が集まり、願証寺証書を盟主として一揆を起し、元亀元（一五七〇）年一月、集まった門徒たちは、川に沿って島状に自然高地が発達した木曾川を渡って小木江城砦（愛西市立田町森川）に押し寄せ、信長の弟・信興を自害に追い込みました。

願証寺方は、杉江の長島城を本拠に四方に一六の砦を築いて防御を固めました。特に堅固な砦は五端城と呼ばれ、伊勢湾・桑名方面に大島・中江・屋長島の三砦、美濃方面に大鳥居、尾張方面には篠橋に砦を置き、周囲の砦と連携して防御線としました。

一方、元亀元（一五七〇）年から元亀三（一五七二）年にかけての信長を取り巻く状況は、本願寺・浅井・朝倉・六角・比叡山などと畿内・近江で戦いながら、甲斐の武田信玄の侵攻にも備えなければならぬ厳しい戦況にありましました。こうした苦況の中でも、尾張・美濃を脅かす長島一向一揆の平定は重要な懸案で、信長は大軍をもって長島に侵攻しました。

元亀二（一五七一）年五月、五万の織田軍は三方面から長島に侵攻しました。織田軍本隊兵二万は津島から南下、中筋口（木曾川筋）から一万が木曾川沿いを南下、川西（揖斐川右岸）では二万が太田口から多度に侵入、これを迎え討つ一揆勢は約七万人であったとい

われています。

織田軍は津島から佐屋方面、中筋口から立田・松ノ木方面を攻めたと思われませんが、その攻防についての史料は少なく戦況は定かではありません。僅かな史料に、「雨天続きで川の水嵩が高く、一揆勢の水練に長けた兵が兵船の碇綱を切って船を流した。」と記述があり、織田軍は不慣れた水上の戦いにさうとう苦戦したものと思われまます。また織田軍の戦死者は溺死が多かったとの伝承もあるので、地形に明るい一揆勢は増水した川を巧みに利用して戦ったようです。

一方、太田口から多度に向かった軍勢は、多度大社・神宮寺・宝雲寺を焼き、大鳥居砦に迫りましたが、脇江川を挟んだ戦いに敗れました。川と山地に挟まれた狭い濃州街道を通る織田軍に対して、一揆勢は山側と川側から追いつ打ちをかけ、織田軍の武將氏家ト全ほかを打ち取り、大きな打撃を与えました。こうして一回目の長島攻めは、織田軍がわずか数日で多くの手勢を失って撤退する結果となりました。

### 日本史上最大の大量殺戮

長島で敗れた信長は、その後も本願寺を中心とした信長包囲網に悩まされ、元亀三（一五七二）年一二月には三方ヶ原で徳川との同盟軍が、武田信玄に大敗する苦況にたたされまました。しかし、天正

元（一五七三）年四月に信玄が病に倒れると状況は一変し、八月に浅井・朝倉を滅ぼし、本願寺勢力を孤立させました。

信長はこの機を逃さず、九月に二回目の長島攻めに乗り出し、六万の軍勢でまず防御線となつて北勢地方の制圧にかかりました。多くの城砦をひとつずつ落としていく戦いは、激しい抵抗にありながら約一ヶ月をかけて北勢をほぼ平定しました。

その頃、畿内で反信長の動きがあつたので、信長は滝川一益らを抑えに残して撤退しました。この帰路でも一揆勢は道中を待ち伏せして、織田軍に大きな打撃を与えました。

天正二（一五七四）年七月、信長は七万の軍勢で再度長島攻略を開始し、佐屋から二万、早尾から三万、香取から二万が攻め入りましました。信長はこの戦いでは、これまでの敗戦を踏まえ、十分な用意をしていました。一揆勢の地の利を活かしたゲリラ戦法には、柔軟な用兵と大量の鉄砲で圧倒し、最も苦戦した水上の戦闘でも、安宅船と呼ばれる大型船を含む六〇〇艘余りの船団で一揆勢の小舟を蹴散らしました。制海権を確保した織田軍は伊勢湾からの補給を絶つて兵糧攻めを行い、一ヶ月経過する頃には餓死者が半数に及んだと云われています。

逃げ場を失った一揆勢の城砦を取り囲んだ織田軍は、徹底した殲滅戦を展開します。「長島に属す

るものは一木一草とて形をとどめてはならぬ。」との命令によって、降伏や退去を許さず、城砦から逃げ出す者は待ち伏せて容赦なく討ち取り、城内に籠る者は女子供まで残らず殺害しました。

糧食を断たれてもなお二ヶ月余も頑強に抵抗する長島城攻めでは、和平を偽って一揆勢を城内から誘いだして皆殺しにしました。これを知った屋長島・中江砦は固く門を閉じ城に籠りましたが、信長軍は周囲に火を放ち焼き討ちにしました。

この戦いの一揆勢の死者は二万人と云われており、日本史上最も凄惨な大量虐殺でした。



長島一向一揆殉教の碑

## 地域の歴史

■参考文献

- 『長島町誌 上巻』 長島町 昭和四九年
- 『日本地名大辞典・岐阜県』 平成二年 角川書店
- 『長島風土記』 金森勝 平成二二年
- 『一向一揆と石山合戦』 神田千里 平成一九年
- 『本願寺と天下人の50年戦争』 武田鏡村 平成二三年
- 『岩波講座 日本歴史8』 峯岸純夫 昭和五一年



# 長島輪中の成り立ち

## 長島輪中の概要

旧長島町の行政区画とほぼ同一の地域である長島輪中は、木曾・長良・揖斐の三川河口に、上流から運ばれてきた土砂が溜まって多数の島となっていた砂州に、人が移り住んで開発していったのが始まりです。砂州の開発が進むと、やがて海を干拓して南に拡大していきました。



第1次長島輪中の村々 (江間政発「桑名郡志」付図より作図)

長島輪中は、明治改修以前は高位部の長島輪中と、その南に鰻江川を隔てた葎ヶ須輪中、さらに南に青鷺川を挟んだ横溝蔵輪中の三つの輪中に分かれていました。長島輪中の範囲を混同しないため本稿では便宜上、明治改修以前の長島輪中を旧長島輪中と表記します。開発は旧長島輪中、葎ヶ須輪中そして横溝蔵輪中の順に行われました。

## 長島輪中の開発

長島輪中は、高位部(北方)から開発(農地開発)が始まり、江戸時代末期には長島・葎ヶ須・横溝蔵の三つの輪中(三輪中)にまとまっています。三輪中は、木曾川下流改修工事(明治改修)によって一つになり、現在の長島輪中となりました。

旧長島輪中は、高位部を上郷、低位部を下郷と呼んでいました。上郷は、平安時代末期から鎌倉時代にかけての史料に坂手・杉江・松ノ木・新所・西川などの地名が見られる地域で、一部を除いて鎌倉時代には開発されていました。また、下郷の半分も中世末期には開発が終わっていました。この地域は七つの島に分かれており、これらを七曲輪と呼んでいました。曲輪といっても集落・農地を包括した連続堤(懸廻堤)で囲まれてはいなかったようです。元和九(一六二二)年、当時長島を領有していた桑名藩主松平定勝が七曲輪を統合して連続堤を築いたのが、最初の輪中形成でした。

こうして輪中が形成されると、かつて河川敷であった土地が新田として開発され、さらに下郷の干拓も進められて、長島輪中は拡大

## 葎ヶ須輪中の開発

長島輪中の南に鰻江川を挟んで干拓された葎ヶ須輪中は、開発時には幕府直轄領で笠松代官所支配でしたが、一部が一時的に長島藩



葎ヶ須輪中略図 (江間政発「桑名郡志」付図より作図)



横溝蔵曲輪略図  
(江間政発「桑名郡志」付図より作図)

領に加えられることもありまし  
た。旧長島輪中が完成する少し前  
の寛永一六(一六三九)年には最  
上位部の鎌ヶ地新田が開発され、  
以後一七世紀末までにはほとんどの  
新田が完成しましたが、宝永四  
(二七〇七)年一〇月四日の宝永  
地震、翌年の大風高波による入水  
で壊滅的な被害が出たようです。  
この輪中が幕府直轄領であったた  
め、幕府は宝永七(一七一〇)年  
に酒井雅楽頭・黒田豊前守・細川  
熊治郎に御手伝普請を命じ、加路  
戸輪中・見入輪中などとともに、



青鷺川跡

この地域一帯  
の復旧を行いま  
した。この工  
事により葭  
ヶ須輪中の形  
態が整ったと  
思われます。  
しかし、翌  
正徳元(一七  
一一)年九月  
一六日の大風  
高波によって

堤防が決壊して多くの耕地が亡所  
となり、農民は苦境にたたされま  
した。笠松代官所に堤防の再築を  
再三願いましたが許可が無く、  
江戸勘定奉行にも嘆願しましたが  
財政難を理由に取り上げられませ  
んでした。そのような中、享保一  
〇(一七二五)年、福井・豊松新  
田の十六名が連判盟約して、老中  
の伊勢参拜の帰路を待ちうけ直訴  
を行ないました。この願い出は幕  
府によって許されましたが、財政  
難で工事費は拠出されず、農民は  
近在の富豪商人から資金を調達し  
て享保一二(一七二七)年から享  
保一三(一七二八)年に築堤工事  
を行いました。葭ヶ須輪中は、そ  
の後も度々水害を受けては再開発  
を繰り返しかえし、後退しつつ前進す  
る干拓輪中の特徴をよく表してき  
ました。



福富十六人衆の碑

### 横溝蔵輪中の開発

葭ヶ須輪中の南、青鷺川を隔て  
た横溝蔵輪中の最初の開発は、宝  
暦七(一七五七)年の横溝蔵新田  
です。白鷺新田は、文政九(一八

二六)年、桑名藩の許可を得て桑  
名船場町の佐藤孫右衛門がもとも  
と亡所であった地を再開発したと  
されますが、これ以前の記録はあ  
りません。

文政六(一八二三)年以降の五  
年間で松蔭新田など一二新田が開  
発され、横溝蔵新田・白鷺新田と  
合わせて一曲輪として笠松代官の  
検地を受けており、このまとめら  
れた曲輪を老松輪中と称していま  
した。しかし、天保六(一八三  
五)年・安政元(一八五四)年・  
安政五(一八五八)年に洪水で破  
堤し、その都度修復工事をしてき  
ましたが、万延元(一八六〇)年  
の高波によって破堤すると復旧出  
来ず、横溝蔵新田・松蔭新田の一  
部を残してすべて亡所となりまし



松蔭新田再墾碑

た。

明治二〇(一八八七)年から始  
まった明治改修によって、横溝蔵  
新田は引堤で面積が半減しまし  
た。他方で明治二二(一八八九)  
年に木曾川右岸に強固な導流堤が  
完成すると、旧老松輪中の地主た  
ちは共同で新しい松蔭・白鷺新田  
を開発しました。しかし、この新  
しい新田も明治二四(一八九二)  
年の濃尾地震、明治二九(一八九  
六)年の暴風雨で被災しました  
が、明治三〇(一八九七)年の復  
旧により一応安定しました。

### 明治改修後の長島輪中

木曾・長良・揖斐三川下流部の  
洪水被害を防止するため、三川の  
完全分流を行う明治改修が、明治  
二〇(一八八七)年に横溝蔵から  
始まりました。この改修工事に  
よって旧長島輪中と葭ヶ須輪中の  
間を流れていた鰻江川と、葭ヶ須  
輪中と横溝蔵輪中の間を流れてい  
た青鷺川が、明治三八(一九〇  
五)年頃に締め切られ、三輪中は  
合体して現在の長島輪中が形成さ  
れました。

#### 参考文献

『長島町誌 上巻』 長島町 昭和四九年  
『日本地名大辞典・岐阜県』

『長島風土記』 平成二年 角川書店  
金森勝 平成二年

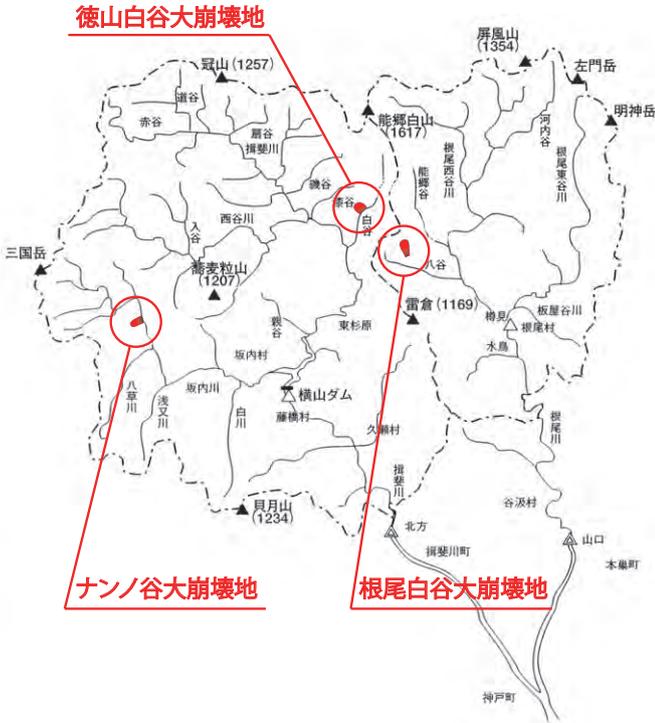
過去の  
災害を学ぶ

第四編

# 越美三大崩れと金原明善



越美三大崩れ位置図  
（『越美山系災害史』の水系図に加筆）



平成二六（二〇一四）年七月九日に木曾郡南木曾町読書地区の梨子沢で土石流が発生、中学一年の男子が亡くなりました。また、同年八月二〇日には広島市北部地域で土石流が発生、死者七四人、負傷者六九人（平成二六（二〇一四）年一月二六日現在）の大惨事が

発生しました。

これら両地域とも花崗岩地帯であり、多量な降雨による風化花崗岩（真砂土）崩壊が原因と考えられています。

梨子沢では八〇年前の昭和九（一九三四）年六月にも土石流が発生しており、南木曾では土石流を意味する「蛇抜」と名が付いた沢が七箇所もあります。

本節では、天竜川の治水工事に関わり、さらにオランダ工師リンドウから水源涵養林の必要性、デ・レイケから砂防への植林の重要性を説かれ、荒廃した山地での植林の必要性を痛感した金原明善が訪れたナンノ谷の崩壊を主に見ていきます。

## 一 はじめに

越美山系は能郷白山（一、六一七m）から冠山（一、二五七m）に連なる標高一、二〇〇m前後の山から成り、揖斐川と九頭竜川の分水嶺です。

崩壊地	標高 (m)	傾斜 (度)	崩壊源頭部位	傾斜長 (m)	崩壊面積 (㎡)	崩壊土量 (㎡)
ナンノ谷	985	31	尾根部	515	210,000	1,530,000
徳山白谷	865	37	尾根部	330	75,000	1,830,000
根尾白谷	719	39	尾根部	335	85,000	1,070,000

越美三大崩れ（『越美山系災害史』より）

なお越美とは、越前と美濃の両地域をまとめた呼称です。

この山系から流れ出ているのが揖斐川であり、本流は右支川の坂内川、粕川や左支川の根尾川の他に、源流部近くには徳山白谷などの支流があり、また坂内川との合流部が横山ダムとなっています。

崩れは、①濃尾地震発生から四年後の明治二八（一八九五）年八月五日、揖斐川右支川坂内川上流の右岸ナンノ谷で発生した大崩壊、②昭和四〇（一九六五）年九月一日に揖斐川町徳山で発生した徳山白谷の大崩壊、③その翌日の一日に発生した根尾白谷の大崩壊です。

## 二 ナンノ谷の大崩壊

明治二八（一八九五）年八月五日、ナンノ谷の大崩壊は揖斐川町坂内川上の坂内川右岸ナンノ谷で二回発生しました。

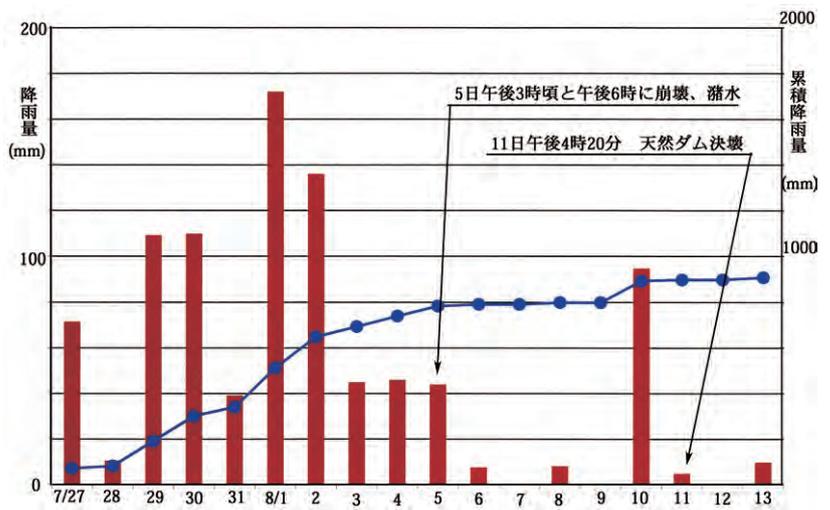
一回目は八月五日午後三時頃に発生し、一時的に溪流を堰き止めました。ほとんど土砂は流出しませんでした。同日午後六時頃に発生した二回目は、崩壊土砂量が東京ドームの約一・二倍（153×10<sup>3</sup>m<sup>3</sup>）、坂内川に高さ三八から一〇九m、幅一〇八mの巨大な天然ダムが出現しました。大崩壊について『岐阜県災異



巡視中の金原明善一行（『坂内村誌』より）

町あり。揖斐、本巢郡にては、農作物皆無の所甚だ多かりし。」と記しています。

(一) 降雨  
岐阜日日新聞によると、「七月一七日の豪雨以降、二一日から二三日と二六日の四日間降雨がなかったが、二七日以後は降雨甚だしくほとんど昼夜連続し、二八日午後一〇時から二九日までの二四時間降雨量は一〇九・二mmに達し、その後なお強雨降り続き三〇日午後一〇時に一〇九・八mmの大



降雨分布図 (『越美山系災害史』と『坂内村誌』より作成)

雨を計れり。この間三〇日午前六時〜同一〇時までの四時間に五四mmの降雨なり」と記している。

図は、七月二七日から八月一三日までの降雨量と累加降雨量を示したものです。

降雨分布図より、五日の崩壊前までに累積降雨量はほぼ七四〇mmにもなっており、この豪雨が崩壊への誘因の一つとなりました。

(二) 地質  
越美山系一帯は美濃帯に属し、泥質混在岩、砂岩、泥岩、石灰岩、チャート等の堆積岩類から成り立っています。

ナンノ谷の地質は、低標高部から中標高部では泥岩を主体とし、チャート、砂岩、緑色岩がブロック状に分布しています。高標高部になると、泥岩、チャートの分布は見られなくなり、露頭には層厚の緑色岩が確認されます。さらに標高八七〇m以上では、石灰岩のみの分布となっています。

つまり、山頂部の固い岩（石灰岩）が柔い岩の上に乗った地質構造（キャップロック構造）をなしており、上部の石灰岩は雨水の浸透や貯留場所となつて基盤岩中に浸透し、大規模崩壊の原因となりました。

なお、この崩壊は四年前に発生した濃尾地震によつて地盤が緩んでいたところに集中豪雨が降り、キャップロック構造の谷が崩壊したものである、と考えられています。

明善はこの依頼を受け、岐阜県会議員・金森吉次郎や山田省三郎を含む一〇数名の明善調査団を結成し、大垣町廓の好美館写真師を同行して七月八日から一七日にか

三、金原明善の揖斐川上流域調査  
崩壊から二年後の明治三〇（一八九七）年七月、岐阜県知事・湯本義憲は、旧知で治山治水の実践者・金原明善に、揖斐川源流部の現地調査と今後の対策の検討を依頼しました。

明善はこの依頼を受け、岐阜県会議員・金森吉次郎や山田省三郎を含む一〇数名の明善調査団を結成し、大垣町廓の好美館写真師を同行して七月八日から一七日にか

す。ナンノ谷の渓流を堰き止めた天然ダムの決壊によつて、下流の集落では死者四人（男三人・女一人）、流失家屋二三戸等の被害が発生しました。

け、大垣輪中の堤防巡視を皮切りに、ナンノ谷崩壊地（徳山北谷の写真撮影八枚）と濃尾地震による根尾谷（写真五枚）の調査を行った後、湯本知事と共に伊自良谷（写真二枚）をも調査しています。

この調査時に明善は六五歳でしたが、連日の強行軍にも拘らず、乞われれば夜に地方関係者との談

話

話

話

話

明善の行程表 (『岐阜日日新聞 明治30年7月8日から23日』より作成)

日	内容
7 (注)	金森吉次郎の亡父・金四郎の墓に詣で、夜に地元有志30人余りと治水等の話をする。大垣の金森宅で泊。
8	大垣町を発し、揖斐川沿岸の堤防を巡視後、安八郡神戸町⇒白鳥・杉野(揖斐郡池田町)の護岸工事を視察。その後、舟で清水村破壊跡を見、揖斐町に至る。夜講演、揖斐町泊。
9	揖斐町発、揖斐川上流沿岸を視察。久瀬村大字東横山で泊。
10	旧藤の釣橋(今の横山橋)を渡り、横山尋常小学校の苗圃を見学⇒坂内村大字坂本を経て広瀬で山林に関して談話後、ナンノ谷へ行く。夜10時頃に東横山に戻る。行程13里余。
11	11時に東横山を発。揖斐町に帰着し8日と同じ所に泊。
12	揖斐町を発し、根尾谷に向かう。揖斐町⇒谷汲山華厳寺で昼食。午後、根尾川沿岸を廻り、本巢郡日当村で泊。
13	午前4時発。日当村⇒同郡市場村(本巢市根尾市場)で小廻⇒崩壊地視察⇒市場村で治水山林の談話後、泊。山田省三郎と金森吉次郎らは揖斐町へ帰着。
14	早朝に市場村発し、揖斐町へ帰着。揖斐町での融資懇談会の後、大垣町に帰着。
16	大垣⇒岐阜市へ。湯本知事と懇談、官舎泊。
17	知事と伊自良谷を巡視。伊自良村役場⇒午前10時に伊自良村大字長瀬の甘南美寺で昼食。講演後、徒歩で谷奥へ向かう。岐路、同村大字松尾(山県市松尾)の共有苗圃を見て知事邸着。
18	大垣町へ戻り、かねて約束の西濃地方有志者への講演を大垣町尋常中学で行う。参加者は200名余、大垣泊。
19	6時50分大垣発の列車で関ヶ原に至り、人力車を雇って今須村に至り、関ヶ原に引き返して昼食後、養老に向かう。牧田川上流を視察して午後3時に養老公園に着、夜は金原・山田・金森らと談話。養老泊。
20	大垣に戻る。

注) 7月8日付の記事では、6日金森宅泊で7日揖斐川町泊となるが、10日の記事では、8日に揖斐町泊となっており、記載された一行の予定の日付と泊地はその後の記事と一致しているので、ここでは7日を金森宅泊とした。



根尾白谷の河道堆積  
1997年11月撮影  
〔『越美山系災害史』より〕

話や講演を行っていました。当時天皇は京都に滞在中であったので、七月二三日、明善は朝七時三〇分発で大垣へ行き、掛斐川水系源流視察の報告書を「上書」と言う形で取りまとめ、七月二四日に明善と金森は、上奏文に被災地の説明を加えた写真を添え、土方宮内大臣を経て天覧に供するとともに、松方総理大臣らにも同じ写真を提出しています。

#### 四、徳山白谷の大崩壊

昭和四〇（一九六五）年九月四日、台風二四号の接近で活発化した秋雨前線によって、掛斐郡藤橋村の掛斐川左支川白谷の中流右岸（本川合流点から約四・五km地点）で大崩壊が発生しました。崩壊土量は東京ドームの約一・五倍（ $1.83 \times 10^6 \text{ m}^3$ ）で、高さ約六五mの天然ダムが白谷に出現しました。この天然ダムの一部決壊によ

る洪水流は、横山ダム上流の掛斐川町東杉原集落付近で護岸を破壊しました。白谷は、能郷白山に源を發し南流して、現在は徳山ダム貯水池に注ぐ細長い流域形状です。流域の地質は、上流域が白亜紀から古第三紀の花崗閃緑岩、徳山白谷大崩壊地を含む中から下流域は、美濃帯の中生層から古生層で、輝緑凝灰岩が主体です。流域内には急斜面が多いため崩壊が発生しやすく、崩壊後に流域面積（一八・九km<sup>2</sup>）の約八％が崩壊地となりました。

崩壊発生時刻は明らかではありませんが、近傍の徳山小学校裏や藤橋村東前の谷の崩壊が九月一日の二二時頃であること、時間雨量（旧建設省徳山観測所）が午後九時から一〇時に一〇三mmのピークに達していることから、午後一〇時頃発生したものと推定されています。

徳山白谷の大崩壊では、至る所で山崩れ、橋の流失、道路の損壊が発生しましたが、崩壊地の周辺には人家などが存在しなかったため、崩壊による直接の被害は生じませんでした。

#### 五、根尾白谷の大崩壊

昭和四〇（一九六五）年九月一三日から一五日の集中豪雨で、一五日の正午頃、大音響とともに根

尾白谷源頭の尾根部、特に東側の部分が崩壊しました。推定崩壊土砂量は東京ドームの約〇・九倍（ $1.07 \times 10^6 \text{ m}^3$ ）とも言われている大崩壊でしたが、幸いにも崩壊土砂の多くは崩壊地に堆積し、崩壊地に最も近い集落の埋没は免れ、崩壊による直接の被害は生じませんでした。

#### （一）連続した台風と奥越豪雨

九月一〇日から九月一八日に、3つの台風（二三、二四、二五号）が相次いで上陸・接近しました。

これら連続した台風の内、一日に沖ノ鳥島の南西海上で発生した台風第二四号は、一七日二一時頃、三重県大王崎付近に上陸しました。

九月一三日から一五日にかけて、台風二四号に刺激された前線の活動により、掛斐川流域に記録的な大雨が降りました。この時の二四時間雨量は、東杉原観測所（藤橋村）で八二・四・五mm、徳山観測所（旧徳山村）で七〇・六・〇mm、一時間の雨量はそれぞれ一〇〇mm、九四mmでした。

この地域の年間降水量は二、七〇〇から三、五〇〇mmであり、この雨は実に激しい豪雨でした。この雨により、徳山白谷（旧徳山村）と根尾白谷（根尾村）の二箇所で大規模な崩壊が発生し、この災害が、越美山系砂防事務所が発

足の契機となりました。

#### （二）地質

根尾白谷の基盤岩は、ナンノ谷と同様に美濃帯の粘板岩、チャート、砂岩、石灰岩、緑色岩から構成されています。また、低標高部には粘板岩、砂岩、チャートの分布がみられ、高標高部では緑色岩、石灰岩の順に地層が変化しています。この粘板岩、チャート帯↓緑色岩↓石灰岩の出現順序は、ナンノ谷での地層の出現順序と一致しています。

原義文らは、昭和四〇（一九六

五）年以前に現在の崩壊とほぼ同じ位置で小規模な崩壊が発生している様子を確認し、この大崩壊も濃尾地震によって根尾白谷の崩壊地全体が緩んでいた、と述べています。

#### 参考文献

「越美山系災害史」

越美山系砂防工事事務所

平成二〇年

「岐阜県災異誌」

「岐阜日日新聞」（現岐阜新聞）

明治二八年八月三日版

「坂内村誌」

坂内村誌編集委員会平成二六年

「越美地域における濃尾地震以降に発生した大規模土砂移動」特に、石灰岩地帯の大規模崩壊について」

原義文 田島靖久 井上公夫



# 宝暦治水と平田鞞負

金城学院大学名誉教授  
宝暦治水史蹟保存会会長

中西達治



中西 達治

昭和14年 岐阜県に生まれる  
昭和37年 名古屋大学文学部文学科卒業  
現在、金城学院大学名誉教授、宝暦治水史蹟保存会会長。  
\* 太平記など日本の戦記文学、国語教育学、郷土史の研究  
【著書・論文】  
『太平記の論』(おうふう)、『教室で文学を読む』(三省堂)、「平田家の祭祀と承譜を巡る諸問題—平田鞞負関係の新出資料について」、『今宝暦治水に学ぶこと—史実と顕彰の歩みをとらえる』等。

## 一 はじめに

宝暦治水の主要工事  
〔薩摩藩御手伝普請目論見絵図〕(個人蔵)より作成

平成二六(二〇一四)年は、宝暦治水二六〇年として、いろいろな催しが行われた。この数え方は、実は仏教式の年忌の数え方で、工事の完成をもとにして考えれば、平成二七年がちょうど二六〇年ということになる。



## 二 宝暦治水とは

宝暦の治水工事は、地域の水害を防ぎ、豊かな実りをもたらしたとして、今も地域住民に記憶され、慰霊と顕彰活動が続けられているが、工事の実体は一体どのようなものだったのか、これが意外にはつきりしていないのではないかと。顕彰活動を次世代につなぐためには、史実の確認が欠かせない。その辺りを、平田鞞負に即して今一度整理してみたい。

宝暦治水は、木曾三川中・下流の水流を調整するため、現在の愛知・岐阜・三重三県にまたがる広大な地域において、薩摩藩が宝暦四(一七五四)年から五年にかけて施工した手伝い普請である。

手伝普請は、治水工事に限らず、幕府が必要とする土木工事に各藩を指名するもので、幕藩体制下ではこ

れは、戦場への出役と同じく義務であり、拒否はできなかった。

藩士が一堂に会して受けるか受けないかが大議論になるというような問題ではなかったことは、命令を受けた薩摩藩が、国元で受託の届けに藩主が署名した一月二一日には、すでに江戸から第一陣が出発していることを見ても分かる。

この地域では、手伝普請はこの工事以前に二本松藩が担当して、延享四(一七四七)年から五年にかけて行われたのが最初で、薩摩藩の工事は二度目にあたり、以後も何度か繰り返されている。

## 三 総奉行平田鞞負

この時総奉行に任命されたのが、薩摩藩の御勝手方(財政担当)琉球方家老職の平田鞞負正輔だった。寛延元(一七四八)年九月、島津宗信

は、徳川家重の將軍宣下を受け、琉球慶賀使の具志川王子を同伴して江戸に向かう。

鞞負は、琉球慶賀使一行の世話役を命じられて同行、將軍にも面会を許されている。薩摩藩を支える実力者だったのである。財政担当家老として、藩主が江戸に出府している間に国元で儉約令を出すなど、精力的に動いていた。大阪の商人に宛てた藩の借金についての手紙が、苦勞の跡を偲ばせている。

宗信の言行録『古の遺愛』中に鞞負は、財政難の藩政を救う道は、質素儉約が大切だと論じた藩公宗信の名君ぶりを讃える脇役として出てくる。藩内での鞞負の存在を物語る貴重なエピソードである。こんな財政難のさなかに、木曾三川手伝普請の命令が届いたのである。

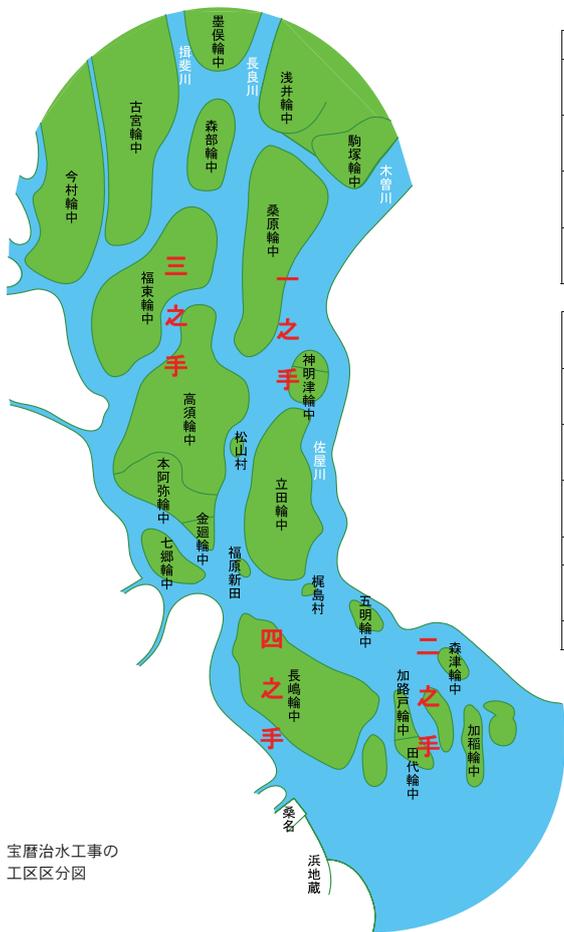
■宝曆治水工事の工区分と工程

工区	工事区間	第一期	第二期
一之手	濃州桑原輪中より尾州神明津輪中まで (十三ヶ村)	定式普請	水行普請 (逆川洗堰工事)
二之手	尾州梶島村より勢州田代輪中まで (十四ヶ村)	定式・急破普請	水行普請
三之手	濃州墨俣輪中より同国本阿弥輪中まで (百ヶ村)	定式・急破普請	水行普請 (大樽川洗堰工事)
四之手	勢州金廻輪中より同国海落口浜地藏まで (三十ヶ村)	急破普請	水行普請 (油島締切工事)

■宝曆治水工事の使用材料及び工事費

木材	120,743本 但3間半(6.3m) 末口1尺4寸(0.4m)以下
御林木	5,816本(官材) 但6間5尺(12.4m)以下 目通5尺3寸(1.6m)以下 此立木根伐松3,236本
粗朶	700束 唐竹 1,728,709本 但目通5.6寸廻, 葉付竹 14,135本 但目通4.5寸廻
石材	41,724坪1合(250,762㎡) 砂利土 203,403坪9合(1,222,457㎡), 藤 10,501房, 空俵 162,870俵
繩	55,404房
銀	13,378貫815匁 換算 220,298両 藩債納納税金増徴等 推定 150,000両
総合計	約40万両(米価換算1両は米約4俵にあたり此の費用は160万俵となる。)

「宝曆治水と薩摩藩士」(伊藤信)による



宝曆治水工事の工区分図

四 工事の規模・内容と薩摩藩士の仕事

手伝普請の場合、実地検分から工事のプラン、見積もりまでは幕府が行う。指名された藩には、計画に基づき、施工することが求められる。追加工事や仕様変更に伴う費用増加は、すべて担当者側の負担である。

この工事の場合、最終的に約四〇万両を要したといわれている。当初幕府側が示したおおよそ一三万両という数字はあくまで予想であって、実際の所は工事をしてみないと分からないということである。鞆負には、当初の見込みをどれだけ超過しようが、とにかく幕府に命じられたとおり工事を完成させなければならぬという義務があった。

二月から始まった第一期工事では、切れた堤防の復旧(急破普請)や、これまでの堤防の補強工事(定式普請)などが施工された。これに対して九月から始められた第二期工事は、水行を調整す

るための締切堤や洗堰などの大規模な新規工事を中心だった。工事区域は、総計一九三カ村、堤防の延長一〇〇キロメートル以上(六、三六一間・約二八里)に及ぶという一大プロジェクトだった。

幕府側はこの時、水害で疲弊した地元住民救済のためもあった。地元民優先の村方請負にするよう指示した。

五 鞆負の苦勞 不足するスタッフ、必要なのは事務能力

総奉行に任命された鞆負が、最初に直面したのが資金集めの苦勞だったことはよく知られているが、実は現場に到着してからの資材集めや、流通ルートの確保、作業員を集めて、作業を滞り無く進めてゆくこともっと大変な作業だった。

第一期工事が竣功して休工中の七月二二日、鞆負は手紙を国元に送って、新規工事では、歩行士五八人、足軽四四人が不足する。九月はじめまでに揃えてほしいと、人員の増派を要請した。工事の材料集めが大変で、石だけでも一日に三〇〇艘が動いている。土砂はこの一〇倍、買い入れを手配し、受け取る人手が全く

足りないというのである。

派遣される藩士の条件については、年功や家柄とは関係なく、若くても資材受取のための記録と計算が出来る者がいい、寒いところだから高齢者はいらぬといひ、さらに自分の者は、必ず下人は地元から連れてこい、そうでないと自己負担が多くなりすぎる、と忠告している。細かな気配りをする鞆負の性格がよく表れている。

現在知られている犠牲者の中に鞆負関係者は、平田家内(平田家の家人)と添え書きのある黒田唯右衛門(常業寺)、平田鞆負下人とある長左衛門、岩七(天照寺)合計三名の名がある。この時鞆負は、家格にふさわしく五名以上の召使いを引き連れてきていたのである。

六 二期工事の開始

秋の新規工事は、大幅な現状変更になるため、地元住民から苦情が相次いだ。

このころ手伝い方は、現場に駐屯している薩摩藩士のうち、小奉行三人中七人、歩行士六四人中六人、足軽二三〇人中九〇人が病に倒れており、病死者数十人に達しているという記録が残されている。

九月二四日、一之手から四之手まですべての工区において秋の工事が開始された。最終工法が決まらないまま、とりあえず油島堤防の下埋め工事をはじめられたが、大樽川は洗堰、油島は中間を空けた川分け堤と最終的に決まり、すべての工事が終わったのは、宝暦五（一七四五）年三月二七日のことであった。

## 七 油島工事の実体

この時の工事の一例として、油島工事の全体像を見てみよう。この工事の目的は、木曾川本流と揖斐川との合流する地点約二キロメートルを分流して、揖斐川西岸の洪水被害の減少をはかることにある。寛延元

系図に伝わる流家嫡負朝平田  
系図に伝わる氏平田  
系図に伝わる家流家朝平田  
〔平姓 平田氏系図〕  
平田朝負嫡流家蔵

○寶暦三年癸酉十二月 重年公被<sub>レ</sub>伊勢尾張大藏

三川之地治水助役之 台命翌年甲戌正月十五日 公命平輔為助役惣奉行功被<sub>レ</sub>司年正月廿九日 平輔發慶府同三月至濃州安八郡大牧村入旅 舍至同五年乙亥五月其間經風災暑濕指<sub>レ</sub>揮若千 偏史及許多人民辛苦莫大焉助役功成終送 公

官之清見 於是乙亥五月廿五日廿六日薩人悉解 役歸國或東都勤役之人 昔回<sub>レ</sub>江府芝郎也 正輔亦 期同廿六日 茲發大牧村向<sub>レ</sub>江府奉<sub>レ</sub>兼日所養之病 頓起醫瘡不達同廿五日晚天終命 於大牧村旅舍 年五十二法號高光院藏端岑<sub>レ</sub>排木居士葬遣教 於城州伏見大黒寺埋髮髮<sub>レ</sub>於慶府妙谷寺

を新築して、中央約五四六メートルはあけたままとした。これが宝暦治水における油島工事の実体である。

宝暦治水最大の難工事は、この油島の部分締切と、大樽川、逆川の洗堰である。このような大難工事を、前年の九月から始めて次の年の二月までに完成させた。予算に縛られる現在のシステムでは考えられない超突貫工事だったことが分かる。工事を、幕府の命令通りみごとに竣工させたときの朝負の喜びがどれほど大きかったか想像にあまりがある。

## 八 幕府側役人も賞讃した 工事の出来栄え

工事が完成した時、幕府役人は率直にその出来栄えを褒め称えている。工事全体について幕府役人が洩らしたのは、「ご検分まで首尾よくあい済み、お互いに大慶に存ずる」ということばだった。幕府役人が、お互いに結構なことだといっているのだ。工事を始めるにあたって、幕府側の役人は、血判を押した誓約書を残している。手伝を命じられた薩摩藩士と同じように、幕府側役人にも自分の名譽がかかっていたのである。

それを受けて、平田朝負は、五月二四日国元に宛てて、「幕府の命令

通りに仕事が出来ました。藩の名譽を守ることが出来て本当にうれい、おめでとうございます。」という内容の手紙を書いている。必要経費はその都度国元に依頼して支出してもらっている。予算超過の責任など取る必要は全くない。個人名で借金をしたというのは話としては面白いが、あり得ないことである。

## 九 平田朝負の最後

乙亥五月二十五日二十日薩人悉解役帰国或東都謹役之人者向江府芝郎也正輔亦期同二十六日欲發大牧村向江府奈兼日所養之病頻起医療不達同二十五日晚天終命於大牧村旅舍年五十二法号高元院殿節岑了操大居士葬遺骸於城州伏見大黒寺埋髮髮於慶府妙谷寺

すべての公務を終えた薩摩藩士たちは、五月二五日から二六日にかけて全員が江戸芝の薩摩藩邸、あるいは国元へ、それぞれ帰ることになっており、朝負も二六日、江戸滞在中の藩主重年に報告するため、江戸に向かつて出発することになっていた

のだが、二五日の早暁、これまで療養中だった病が急激に悪化して、手当の甲斐なく大牧の役館でなくなつた。時に五二歳、遺骸は即刻輿に乗せられて京都伏見の大黒寺に送られた。

平田朝負嫡流家に伝わる系図の記述である。

多額の出費と多くの犠牲者が出たことを藩公に詫びるため切腹したが、それを表沙汰にしないために病死としたという俗説がある。何度もくり返すようだが、予算超過に朝負の責任はない。病を押して体力の極限まで陣頭指揮に当たり、首尾よく検分が済んだとたんに張り詰めていた気持ちりがとぎれた、という系図の記述の方がこの場合はふさわしいのではなからうか。大黒寺では、薩摩藩からの手当により、丁寧に仏事が営まれた。

### ■参考資料

『平田氏系図』

平田煌二氏蔵

『治水雑誌』（創刊号く十一号）

大日本治水協会

『濃尾勢三大川宝暦治水誌』

西田喜兵衛

『宝暦治水と薩摩藩士』

伊藤信

『岐阜県治水史』

岐阜県

# 西川の八幡さま (長島町西川)

木曾・長良・揖斐三川の河口にできた七つの島が、一つの輪中になった頃、平方村に西村孫左衛門というお百姓がいました。

ある日、木曾川へ川漁にきた孫左衛門が、投げ入れた網を引き上げたところ、魚は一匹もかかっておらず、青紅色の美しい石が入っていました。石を川へ投げ捨てて、再び漁を始めましたが、今度も網には魚がかからず、石だけが入っていました。何度、石を捨てて網を投げても、網には石だけが入っていました。

そこで、試しに石を堤に置いてから網を入れると、たくさん魚がかかっていました。不思議なことがあるものだと思いますが、孫左衛門は家に帰りました。

その夜、夢に石が現れ、「私を西川村の産土神うぶすながみに祀って、八幡宮として崇めなさい」とお告げがありました。早速、西川村で事情を話して、村の地藏屋敷に神社をつくって、青紅色の石を祀って八幡宮としました。

また、川に囲まれた輪中では、幾度となく洪水がありました。天和の頃には、今までにない大洪水があり、多くの人が亡くなりました。それ以来、八幡宮の氏子たちは、正月の一日に社に集まり、豊作を祈って大釜でお粥を煮て食しました。そのとき七・五センチほどに切った細い竹にお粥をいれて、中に入った米粒を数えて作物のできを占いました。この占いは明治四二年になくなりましたが、青紅色の石は今も崇められているようです。



## 編集後記

歴史記録は、「過去の災害に学ぶ」を四回に渡り連載しました。次号からは、「流水を制する水制」をテーマに連載していきます。

なお、この資料は、創刊号からの全てが木曾川下流河川事務所ホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上

「願証寺跡」

船頭平閘門から少し下流の杉江地先。長島一向一揆で焼失した願証寺は、正確な寺跡も不明のまま、明治改修でこの辺りの河底に沈みました。

下

「木曾川橋（トゥインクル）」

木曾川河口部。伊勢湾岸自動車道の木曾川橋(1,145m)は、揖斐川橋(1,397m)とあわせてトゥインクルの愛称がつけられ、名港トリトンとともに伊勢湾岸自動車道を代表する長大橋です。

## 木曾川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曾三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。



船頭平閘門  
木曾川文庫



### 《開館時間》

午前8時30分～午後4時30分

### 《休館日》

毎週月・火曜日(月・火曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

### 《入館料》無料

### 《交通機関》

国道1号尾張大橋西詰から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分

木曾川文庫へのお問い合わせは

〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原

TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166

Mail sendouhi@dream.ocn.ne.jp

### KISSOホームページ

<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html>

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハネス・デ・レーケ」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

『KISSO』 Vol.94 平成27年3月発行

編集

木曾三川歴史文化資料編集検討会(桑名市、木曾岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか)

発行

国土交通省中部地方整備局木曾川下流河川事務所調査課

〒511-0002 三重県桑名市大字福島465

TEL(0594)24-5715 ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/>